

# 扇子

蒸し暑い日本の夏に欠かせないのが扇子です。好きな時に自分の手で風を送り気軽に涼をとれる扇子は、昨今のエコブームでそのよさが見直されています。風を送ると言えば「うちわ」もありますが、扇子にはエレガントな雰囲気があり、しかも折りたたみ可能で軽くてコンパクトな所が魅力です。



扇子は普通、骨組みとその上に貼られた和紙からできていて、数本から数十本の細長い竹や木で出来た骨を束ねて端の一点で固定し、開いたり、折りたたんだり出来るようになっています。この骨を束ねている部分が非常に重要で「かなめ要」と言います。この要がきつなくてもまた緩くてもうまく開かず、全く機能しなくなることから、「かんじんかなめ肝心要」の語源になりました。骨を滑らすように開くと和紙が貼られた扇面が表れます。そこに描かれた絵が扇絵で、江戸時代初期の俵谷宗達はこの扇絵を得意としていました。「風神雷神図」はとても有名です。



平安時代には、おうぎ扇（昔はおおぎ扇と呼ばれていました）は儀礼、贈答、コミュニケーションツールとしても使われていました。「源氏物語」には、和歌を書いて贈ったり、花を載せて贈ったりしたことが書かれています。そんな背景も扇子をロマンティックで上品な物にしているのかもしれませんが、当時から、コンパクトに折りたためる日本のおおぎ扇は中国で高く評価され、中国経由でヨーロッパへも輸出されます。時代とともに儀礼の道具としても重んじられ、公家や武家また一般庶民の別なく、日常や冠婚葬祭での持ち物の一つとなりました。

現在でも扇子はあおぐ以外に様々な場面で使われています。

扇子は無限を表す「末広がり」の形をしていることから、縁起のよい物とされ、結婚式などのおめでたい席で使われたり、歌舞伎や日本舞踊、落語などの伝統芸能でも必須です。想像力を働かせる落語では、扇子が時にはそばを食べるお箸になったり、釣竿や望遠鏡になったりもします。

また茶道では、扇子は客のシンボルとされ、お茶に招かれた客が亭主に敬意を表すために使います。16世紀の半ば、武士は茶室の外で刀をはずして外の刀掛に置き、そして茶室に入りました。茶室の中では、彼らは刀の代わりに儀式用の扇子を持っていました。こ

の習慣が、のちに客としてのマナーの一つになったといわれています。

長い歴史と様々な意味を持つ扇子。外国の方へのおみやげは、コンパクトでセンスのよい日本の扇子はいかがでしょう？

参考・・・ウィキペディア扇子

茶席で話す英会話（淡交社）

